

第9回 愛知県河川整備計画流域委員会 議事抄録
<大田川・信濃川・日長川・神戸川流域、堀川圏域 >

日時：平成16年8月27日(金)13時00分～17時05分

場所：愛知県産業貿易館 本館5階 特別会議室

1. 開 会

2. 主催者挨拶

3. 議 題

1) 大田川・信濃川・日長川・神戸川流域河川整備計画(第1回)について

- ・地域に関する委員の紹介
- ・流域の現状と課題について
- ・住民アンケート結果について
- ・質疑応答

委員長

まず、治水に関する現状と課題について、御質問、御意見があればお願いをしたい。

事務局から、現在工事实施基本計画に基づいて暫定的な整備を実施しているAグループの大田川と日長川と、一時的な整備は昭和40年代に終わっているが、その後の流域の市街化に伴って現在ではほぼ全川にわたって流下能力が不足しており、今後、流下能力のアップを図っていかなければならないBグループの信濃川と神戸川に分けて説明があった。

委員

委員長がまとめられたAグループとBグループの理解が、事務局の説明ではもう一つよくわからなかった。

まず聞きたいのは、昭和40年代に一時改修したBグループの河川は、工事实施基本計画とか全体計画みたいなもの考えたのかどうか。

もう一つは、整備計画で目標レベルをどの辺に見ているのかが気になった。大抵の川は1/5レベルに比較して課題を抽出されたけれども、日長川だけは1/10というレベルに比べてどうかという書き方がされていた。4河川で整備レベルに差を持たそうとしているのか、それは河川の重要性を考慮したためか、整備の進み具合や現状と目標とのギャップで考えているのか。

事務局

信濃川・神戸川のBグループは、昭和30年代後半に計画を立てて約10年ぐらいで改修が終わりその時点で改修完了という位置付けで、その後河川の整備は行われていないという状況である。

委員

その時点で大田川とか日長川は、一時的な改修がまだ終わってなかったということか。

事務局

日長川は昭和50年代ごろから、大田川は昭和45年ぐらいから当時の計画に基づき整備を始めているが、改修の進みに合わせて計画等も変更しながら、現在の形で整備していくという状況である。

委員

大田川は割合古くから流域が開発されて、人口とか土地利用の変化図を見ると、かなり早い時期にずっと伸びて、その後停滞している。それが昭和40年代ぐらい。安定期に入ったにもかかわらず、一時改修されないまま大田川は残っていたということか。

事務局

大田川・日長川のAグループは、用地等の諸問題もあって河川改修がなかなか進まなかったという現実もあった。このため計画を見直して現状の工事実施基本計画に基づいて改修を進める結果となった。

委員

その質問に関しては結構だ。計画目標規模の1/10と1/5の差は、今後整備計画のところで見せようとするのか。

事務局

大田川は1/5であり、日長川は1/10である。

日長川は、昭和49年災害をきっかけとして1/10で改修が始まり、そのときの考え方で当時の災害のレベルに合わせるということもあったかもしれない。大田川については、もともと1/5で整備を始めて、今でも1/5である。

委員

一つ一つの川について整備計画を考えると、それでも良いが、4川一緒に並べて話をしたときに、経緯だけで整備計画が決まっているのだとすると、ちょっと目立つ気がした。経緯だけでは納得してもらえないかもしれないので、説明を工夫したら良い。

事務局

その辺を工夫して整理したい。

委員長

もう1点、信濃川と神戸川の工事実施基本計画とか全体計画はどうなっているか。

事務局

参考資料に当時の信濃川と神戸川の計画を載せている。

委員長

これはまだ生きているか。

事務局

これはもう終わっている。

委員長

今日の資料にも、大田川と日長川については、流量配分図が出ているが、信濃川と神戸川は出ていない。

事務局

神戸川は、昭和40年策定、当時の土地利用で流出係数0.7、時間雨量50mm対応で、信濃川は、昭和38年策定、当時の土地利用で流出係数0.7、時間雨量40mmで計画をつくっている計画流量配分がある。

委員

一時改修が終わった河川は、暫定の安全度レベルが達成されたので、ほかの安全度の低い川に着手しようというのはよくわかった。今度全部並べて基本方針と整備計画を考えることになれば、昭和40年代の計画のうち工事実施基本計画に当たる部分が残っているか、今回新たに決めておかないといけない。

古い工実計画をきちっと位置づけるか、新たにそれを改定するかという手順をしておかないと、最終目標が見えないということにはならないか。

事務局

当時の計画は、暫定とか将来というものがなくて、今説明した雨量で河道計画を立てている。

委員

レベル的には、将来計画か暫定計画か。

事務局

実態としては暫定である。

事務局

信濃川と神戸川については、今の土地利用あるいは将来を予想した土地利用に応じて基本方針を策定し、その上で整備計画を位置づけて整備計画書としてまとめていきたい。

委員長

この4川ともに将来計画である河川整備基本方針を定め、それから、当面20年先くらいの河川整備計画を、この委員会の中で計画を定めていくということ。

委員

土地利用の変遷について伺う。15ページの信濃川の土地利用で森林が一時的に増えており、19ページの神戸川でも昭和56年に山林が増えているのは何か原因があるのか。また、都市化の進展が治水の上で一番の課題だということであるが、将来の土地利用計画をどのように推計したのか伺っておきたい。

事務局

土地利用面積は当時の都市計画図をもとに算定しているが、指摘の点については調べさせてほしい。

整備計画における将来の土地利用は、いわゆる30年後の土地利用を現在の市街化区域がすべて市街化されたという前提で、そこから出てくる水に対して安全に流れる川というのを整備計画の中で位置づけていきたいと考えている。

委員

知多半島は耕作放棄が結構多いということで、水田だったところがそのままになって、それが森林扱いになっているところもかなりあるのではないか。

事務局

参考にさせていただく。

委員

洪水や高潮などの自然現象というのは、今から何年先にどういうことがあるか予測はできない。いつ台風がくるか、知多半島にどれだけの被害があるかという予測はつかない。これに対して、市街地開発というか土地利用の予測は、ある程度はできるかどうかということである。

例えば19ページの土地利用変遷で神戸川の場合に、市街地がどんどん増えていくという

ことがわかる。水田や畑や山林は逆にどんどん減っている。したがって、平成 23 年ぐらいだと市街地が例えば 50%突破してしまうような予測はできるかできないか。

土地利用の予測が出来れば、河川をどうしたらいいかということも出てくるかと思う。自然現象は何年先にどんなのがやってくるのか予測は出来ないが、土地利用の方はグラフから読み取っていくことができる。そういう予測を持って河川をどういうふうにしたらいいかの考えはあるか。

事務局

河川の計画は過去の降雨の実績等から確率降雨を算定して計画づくりをしている。土地利用についても、今後の土地利用、市街化の進展も踏まえて計画づくりをしていきたいと考えている。

委員長

土地利用をどう見込むかという点は、市街化区域は 100%市街化され、市街化調整区域でも、現在もう実質的には市街化しているところは現状のままだと考えていいか。

事務局

その考えで計画を考えていきたいと思っている。

委員

保水能力を持つ面積がだんだん少なくなっていくから、そこに東海豪雨みたいな雨があつたとすれば、氾濫は必ず起きるわけである。

前にいった自然現象をどう解釈しているかということ、台風などがいつどんな影響を与えるかは、前もってわからないし、どこの^{つつみ}堤の強度が不十分であったかは通り過ぎてから言えることだ。したがって市街化されて保水能力がだんだん無くなれば、平地の水の行き場が無くなる被害が生じる。その意味で、土地利用の予測を持って河川の整備を考えているかと聞いた。

委員長

土地利用の変遷、将来の変化をある程度予測して、計画の降雨が降ったときに川にどれぐらい水が出てくるかという計算をしているのか。保水能力の低下を見込んで計算をしているということか。

事務局

そういうことである。

委員

4つの河川流域の開発のあり方を見ると多少違う。東海市とか半田市の場合、農地をつぶして区画整理しているように土地利用変遷図で見える。それに対して知多市の2河川の部分は、河川沿いの水田のところを残して丘陵部を宅地化している。そういう開発のあり方の違いが、河川に与える影響について、町が一つのポリシーを持っていたかということが重要なポイントだ。

仮に開発のあり方が違うとすると、それは河川にどういう影響を与えるのかということについて、フィードバックできる示唆が計画作りの中で得られるのかどうかをお聞きしたい。

事務局

ご意見のとおり信濃川は、南側の開発は結構高いところにあって、東海豪雨でも浸水被害に遭わないようなところになっている。一方、神戸川の方は中下流部で、新しく開発したところは湛水して被害を受けている。

また、日長川については、昔から上流部に市街地が形成されて、多分そういった被害が多いところだった。

委員長

今指摘があった点は、もし可能であれば、分析を考えていただいていた方がいいと思う。

委員

資料として、流下能力など河川部分のところのデータと、土地利用の変遷の間をつなぐ部分のデータがあるといい。

委員長

降雨から河川流量に変換して計算しているところのどういう考え方で、どういう計算をしているかをもう少し説明していただいた方がいい。

事務局

次回には、そのように説明できるようにしたい。

委員長

例えば、田んぼが市街化するということは、単に流出率や流出量が変わるだけでなく一時的な貯留能力も変わるわけであり、河川にどういう影響を及ぼしているのかということもあると思う。

我々はある程度わかっているので聞かなかったが、雨から流量に変換するところの考え

方を次回説明してほしい。

委員

市民にとって川の工事が重要ではなくて、生活している部分の土地利用が身近かもしれない。だから、これまでの説明では身近な土地利用から計算しているところが実は見えない。流出率を0.7にするなどのところを、もうちょっと市民にわかるようにすると良い。

委員長

そうですね。

委員

新しく開発されたところが丘陵部であると、そこは水がつかなかったけれども、新しく開発されたところが河川沿いの低い土地であったらそこは水がついた話があった。どっちがよかったかという、低いところを開発して水がついたということが、ひょっとしたらいいのかもしれない。

丘陵地を開発したということは、それだけ流出が早くなって、下流側に今まで住んできた人の危険度を増したということ。それに比べて土地が低いところを開発しておけば、新しく入ってきた人たちだけに水がついて、従来の土地の安全度はそのまま守れたということになる。その辺の開発から被害発生に至る過程の十分な説明ができるような整理の仕方になっていないということへの指摘があったと思う。

委員

高潮などを治水安全度のところに含めなければならないと思う。伊勢湾台風の時に高潮被害があったが、現在、高潮防潮水門で、どのレベルまで守れるようになっているのかということ、降雨に対して1/10とか1/5と言うように、きちっと言う必要がある。この地域は東南海地震とか東海地震で津波のときの安全度については何も考える必要がないのかどうかということも、入れておく必要があるのではないか。

事務局

高潮や津波については、伊勢湾台風復興事業で整備済みである。

委員

資料では計画レベルについて説明がない。伊勢湾台風レベルというのは、もうめったに来ないのか、また来る可能性があるのか、どれくらいの安全度が確立されているのか雨のように確率表示していない。このような意味合いで、高潮についての整理をした方がいい。

事務局

わかりました。

委員

それから、高潮と津波は守り方が多分違うだろうから、この辺の地域は少し気を使った方がいい。

事務局

今の高潮堤、高潮関係の樋門は、伊勢湾台風の実績に基づいて災害復旧されていて、再び伊勢湾級の台風が来て高潮が発生しても再度災害を受けない高さで基本的にできている。ただ、建築後40年たったということで、堤体の強度という意味で、若干老朽化が進んでいる。

耐震については、知多半島のこの区域では、地盤から判断して今のところ液状化のおそれはほとんどない。

津波の話は、常時の水位、朔望平均満潮位に津波の高さを加えていくと、高潮堤防の高さより下回っているので問題ない。水門が速やかに閉じるかという問題がある。

委員長

地盤沈下の問題であるとか老朽化の問題に関しては、伊勢湾の高潮に関する検討会の資料部分を示していただければ良いと思う。

高潮の場合の安全度評価も高潮検討会の中で議論したので、それを示していただきたい。

委員

環境問題について治水と合わせてお願いしたいことがある。「川は遊び場」のポスターにあるような、立派な川の岸辺に大きな石があって、その上で子供たちが遊んでいるようなところが、知多半島の河川にはない。

ドイツ、バイエルン水利管理局から出ている本「河川と小川」にあるように、川底のコンクリートをはがしたら、緑がどんどん増えてきて、河川に小動物のすむ川となったように、近い将来そんな環境づくりも考えた川をつくっていただけるとありがたい。

今日の発表の81ページ「川にどのような目的で行くか」との問いに対して、小中学生は「ほとんど川へ行かない」、大人の方も「散策やジョギング」が多く、川のそばに道があればよろしいとなっている。小中学生の自然離れが進んでいるのも、三面張りで多自然型には程遠く、水辺に鳥の姿が見られない、虫が飛んでいる、魚の泳ぐ姿を目にすることが少ない。そんな川づくりが今のところはできてしまっているからと感じた。

委員

71 ページの平成 6 年大渇水の断水最大 19 時間の説明は、上水だけの説明になっているが、農業用水、工業用水を含めた表現が良いと思う。

その下の課題は主語がない文章であり、河川・ため池ということか利水ということか、文章の意味が読み取れないので、説明いただけたら良い。現状では不適正に利用されているので、適正な利用が課題というふうにも読み取れる。

事務局

平成 6 年の大渇水時は、指摘のとおり、上水だけではなく工水や農水にも多大な被害が発生している。

委員

最大 19 時間の時間断水というのは上水の状況であり、農業用水だと、例えば 2 / 3 だから、2 日通して 4 日断水とか、そういう形の灌漑方式をとっているわけで、資料では干ばつの説明としては上水だけとなっている。

事務局

指摘のとおり、平成 6 年の大渇水では、農水、工水の被害状況をもう少し書き加えたい。それから、課題の整理は、「今後も連携を進めながら適正な水利用を図っていききたい、河川管理者も含めて関係者と一体となってやっていく。」という趣旨である。

委員長

この表現は正確にしてほしいと思う。

委員

アンケートを見てがっかりしたのは、小中学生に川への関心がほとんどないことである。原因について私が感じたところでは、学校で子供がまず野外で安全ということを考え、川へは行かせるな、それから、池にも近づくなということが長年続いておったからだと思う。

学校の先生を対象に自然観察の講習会をやって先生方に川へ入ってもらうが、川に入ったことがない方の割合が多い。先生も指導している建前上、川には行かない。無関心だと川が汚れていようが平気だが、川に入ると先生方も川の中の生き物を発見する。

今の川を見ると三面張りで階段がなく、子供が入ろうと思っても入れない。川の中へ入ることができるような堤^{つみ}にしていきたい。小さいうちから川に関心があれば、アンケートの結果も変わってくる。

事務局

特に河川改修を進めていく区間について、例えば日長川の知多中学校の斜面林のようなところでは自然観察しやすいよう勾配を緩めた形の堤防も考えていきたい。

委員

このアンケートの分析・集計の仕方について。一般と小中学生を分けたら、川への親近感にすごく差がある。総合学習で川に入るのは小学校3年生ぐらいと思うが、そういう子供がどう思っているかを細かく見る必要がある。総合学習を体験している子供たちは、やっではない子に比べ、川に対するアンケート結果がすごく違うのだったら、総合学習の効果があることとなる。

戦略的アセスメントと言われているように、目的があって聞くアンケートであるから、その目的を生かせるような形で分析するということを考えていった方がいい。

委員長

ありがとうございます。

(休 憩)

2) 堀川圏域河川整備計画(第1回)について

- ・ 地域に関する委員の紹介
- ・ 圏域の概況と課題について
- ・ 質疑応答
- ・ 現地視察について

委員長

治水の現状と問題点に関して質問なり意見をちょうだいしたい。

委員

河川形状は、名城地区のところできく曲がっている。そこから下流は河積が大変狭く、降水量によっては溢れる場合もある。また、ヘドロ浚渫をすれば逆に大変危険になるといいうぐらい、護岸が崩落をしていたり、はらみ出していたりというような状況になっており、現状ではふとんかご等で押さえているというような状況である。この区間を優先して整備をしていかないといけないのではないかと考えているが、貯留型分水路の計画に関連して、この区間の治水対策についてはいかがか。

事務局

この区間についてはかなり護岸が老朽化しているため、早急に整備するという事で現在進めている。また、治水上の問題としても、この区間はかなり狭いという状況もあり、貯留型分水路を松重と城北橋間に設けるといような計画がされている。したがって、中流部の納屋橋も含めて拡幅が困難な部分については、貯めながら流すといような施設を計画づけている。今進めている計画の中では、まず河道を進めており、将来計画の中で貯留型分水路が位置づけられている。

委員

河積が狭い分、分水路で十分補えるといことで、計算上は成り立っているのか。

事務局

そうである。

委員長

本来ならばこども河床を下げたいのだが、東山線があるのでなかなか下げられないため、このような計画を考えたといことだと思ふ。

委員

治水上の問題点として、上流域における浸水が多く、現在3ヶ所のポンプで矢田川の方へ排水しているが、計画高水の計画では、矢田川への排水が考慮されたものか。

事務局

三階橋ポンプ所と宮前ポンプ所については計画に入っている。福德ポンプ所については、暫定の位置づけになっている。

委員

堀川の治水を考える上で、堀川が庄内川流域であり矢田川への排水はこれからの整備方針で決まってくるかと思うが、ポンプを増強することもあるか。堀川は河道の拡幅が難しく、貯留型分水路を考えなければならないが、上流域の問題が非常に大きいため、もっと流域全体として柔軟に考えられないのか。

事務局

庄内川、土岐川の方の整備計画も現在進めており、それらとの連携をとりながら、今後十分に検討していきたい。

委員長

庄内川との接点であるポンプ所と導水については、庄内川の整備計画と十分連携をとりながら整合を図っていかなくちゃいけない問題であると思う。

事務局

ポンプを増強する場合は、庄内川と調整しなければならない。さらに、庄内川では、異常出水のときには排水調整というルールづけられているため、庄内川へ排水できないということもあり、自らの流域で始末できるということも考えていかなければならない。

委員

名古屋市という視点で考えると一番気になるのは、東海豪雨のような都市型水害に至るような場合であり、これは全体計画の中では当然考えられてない。

計画規模が1/30ぐらいのところであれば、流域内で始末することとなる。

治水の議論をするときに、名古屋のような都市では、計画規模を超えるような降雨のときの位置づけをしなければならないという気がする。

事務局

現在、名古屋市では東海豪雨を受け緊急雨水整備計画において事業を進めている。また、堀川の流域では、最近、たくさんの調整池等の内水対策を行っている。

全体計画については、その調整池等との関係を明確にしていなかったため、その点を含め十分検討し、超過降雨対策をどの範囲までするということも考えながら検討していきたい。

委員

現在、それは別に考えていると思われるが、整備計画の中にそういう超過洪水対策という形での位置づけが必要になってくると思われるため、今後の委員会の中で紹介していただきたい。

委員長

全体計画は、委員会で議論しようとしている整備計画と考えていいのか、基本方針的な将来計画なのか。

事務局

同じ都市河川で同じ庄内川水系である新川流域は、下流部で有堤、堀川は掘込であるということから、有堤部と掘込部では少し治水の確率は違うかもしれない。

新川では、川に受け入れる量が非常に厳しいので、田んぼ等の低いところには貯めるという計画を考えているが、名古屋市内ではどこかに貯めることはできない。逆に、少しでも貯めたらビルの地下室に入っていき所もあり、内水の湛水という意味では、許容湛水のマイナスみたいなイメージがあり、確率だけの議論ではなく内水を考えながら設定していかなければならないという問題がある。

今の全体計画は、あくまでも既存の制度に基づくもので、今後の整備計画はあくまでも20～30年間でやり切れるものとして、どこまでの確率が整理できるか。その確率の中で、都市部の内水の安全度を確保しなければならないので、そういう両方を見ながら設定していかなければならない。

委員長

それは、今後この中で議論しながら設定していこうということか。

事務局

そういうことである。

委員

治水の対応方法は、河道と流域、そして河川管理者と下水道管理者がバランスをとってやるとしている。都市の構造の中で余り水を流さないようにするというのが本来的にできれば一番いいと思う。そのためには、例えば建物がすべて水をはじいて下水に持っていかないようにしたり、保水したり透水したりする部分が必要だと思う。河川管理者と下水道

管理者だけでなく、都市全般を考えていくというのがバックグラウンドにあると思う。

治水として考えていくときに、都市構造全体、都市の水の中で建物がかなり水をはじいて出していくことを考える必要があり、そういう視点を、新堀川には入れる必要があると感じた。御器所台地の場合は、オープンなところでは直接地表面に入れるような対策等、河川を考えると、河川だけじゃなくその地表面全体を考えていくことが必要である。

事務局

現在、名古屋市では、雨水流出抑制施策を行っている。民間の方にも御協力をいただきながら、道路の方の舗装については、歩道はすべて透水性舗装にする等を行っている。

次回以降に紹介し、そういった視点も考えていきたい。

委員

例えば、防潮堤を閉め切り、洪水の前に堀川の水を海の方へくみ出し、その中へためるとか、各家庭でといから落ちる水をためておき、打ち水に使うような雨水利用もあり、堀川全体の水の量と地下貯水槽で貯められている量は、どんな比較になるのか。

事務局

新堀川では、堀留処理場というところの上流側、100m 道路に 10 万 m^3 の若宮大通調節池があり。その他に久屋、福德、高辻、福江、南郊を、合流改善を兼ねながらの雨水滞水池がある。平成 12 年の東海豪雨前ぐらいで、堀川で約 3,000 m^3 ぐらい、新堀川で約 7 万 m^3 プラスこの若宮大通には 17 万 m^3 の貯めものがあり、貯留型の分水路は 29 万 7,000 m^3 ということで計画している。

東海豪雨前までの量と、緊急雨水整備計画ということで、現在、6 万 3,000 m^3 ぐらいの調整池をつくっており、大体 24~25 万 m^3 の量はもう現在できている。

委員長

緊急雨水排水整備事業で今貯留管とか滞水池をつくっている。

それが完成したらどの程度の貯留能力を持つのか、あるいは何ミリぐらいの雨に対応できるような状況になるのか、次回にでも紹介いただきたい。

委員

新堀川の若宮の調節池はどれぐらいの役割を果たしているのか。例えば東海豪雨のときの状況を教えていただきたい。

事務局

若宮大通調節池は 10 万 m^3 で、東海豪雨のときにはそれがいっぱいになった。若宮大通

調節池近辺が浸水した状態になった。

委員

名古屋で1/30ぐらいを目指し、整備計画でどこまでやれるかという議論ももちろん大事だと思われるが、堀川というのはもう河川じゃないという感覚で、河川と人工施設、都市そのものの複合体だと見なして、1/30みたいな全体計画に満遍に持っていくというふうな話では、安全度は守れないのではないかという気がする。若宮の調節池が東海豪雨のような災害が来るときには、ピークカット型にするとか、そういう工夫を入れながら施設をつくっていかないといけない。

20～30年の整備計画の中には、緊急整備との兼ね合いでものが決まってくるので、全体計画的な整備は別に整備計画でやり、この間の東海豪雨の名残については別途やるということでは、名古屋の守り方としては不十分になるのではないかと思う。そこをこれからの時間の中でぜひ工夫していただきたい。

事務局

堀川、新堀川の状況を十分解析し、指摘事項について考慮に入れながら整理していかねばならないが、今の段階ではこれらの解析は途上であり、少し時間をいただいて回答したい。

委員長

既存のいろいろな施設、下水の貯留施設、これの適切な運用というのも一つの大きな治水上の課題だと思う。それもこの中で議論ができるように考えていただきたい。

委員

堀川は、その歴史から河川ではなく、江戸時代の河川改修で治水のために掘った運河でもなく、物資の流動のために無理やり掘った川である。しかも、当時の技術とお城の立地の問題で掘られたという、治水とは全く脈絡なしにつくられている。

よって、今日「流域」とか出てくる概念自体が本当はおかしいので、これはある意味で下水であり、道路とか下水道の問題でこの内水氾濫の問題を考えていかなければならない。

委員

浸水している部分は、名古屋台地の上ではなく、基本的には低地である。江川を暗渠にしているが、本来名古屋城の北側の排水を南の方に行って排水していたのではないかと思う。この点を何とかできれば、堀川にかかる負担というのが減るのではないかなと思う。江川の説明が欲しい。

名古屋市の都心の部分は建物がもう立ち上がっているので、その場合の都市化というのはどういうことを言っているのか。それは、北側のところを言っているのか。そうすると、「北部の都市化」という方が正確ではないかと思う。名古屋台地の上から水が出ていくのを防ぐため、新設する大きな施設には、雨水貯留槽をつくれというぐらいのことを名古屋市が言うようなことがあり得るのではないかと思う。

事務局

江川は、現在暗渠になっており、名古屋駅の南を通り中川運河の方で排水していると思われる。隣の箕瀬川も同じく暗渠になっている。これも下水道としての幹川として現在使われている。

都市化の件ですが、流域の北側について都市化をしたということである。

委員

質疑の中で緊急時の対策とは違う話があり、治水に対して二本立てのような議論が進められているような印象がる。この委員会で検討をすべき治水というのは、どういうことを対象にして考えればいいのか。そのことを次回以降具体的にしていきたいと思います。

事務局

過去の計画では、下水道でつくっている調整池というのがその計画に取り込まれていないため、今後の治水計画には、取り込みながら検討していきたい。

委員長

堀川の治水の問題というのは、河川サイドだけではどうにもならないところもあり、まちづくりの問題そのものであるというような認識もやっぱり必要だろうと思う。

現況で、名古屋市の平均気温がどんどん上がってきている。それに伴って集中豪雨の回数も増えてきている。まさにヒートアイランド現象である。将来的な課題になるかもしれないが、それを解消していけば、これも一つの治水対策になるかもしれない。そういうことからすると、非常にいろんな問題を含んでいるのではないか。

委員

堀川流域の治水を考えると、下水道のすべてが合流式であることから、下水道とは切っても切り離せないことになる。堀川の整備は、平成 22 年度までに右岸と左岸の雨水滞水池を計画しているが、東海豪雨で黒川から平安通の区間が冠水しており、本来左岸における貯留施設整備をやるべきかと思う。滞水池、雨水の一時貯留池を設けて、それを例えば名城下水処理場で処理をしてから排水をするという手順になると思うが、それらの対応

を十分されていく計画になっているのか。

江川は下水道幹線として利用され、暗渠化をされているが、大幸川も同じか。

事務局

右左岸の2つの滞水池というのが清流ルネッサンス で謳われている。

もう一つ上流側に大曽根雨水調整池があり、この3ヶ所は、合流改善、下水道事業、合流下水道の改善として、その機能も持たせながら雨水の調整機能も持たせてつくっている。

委員

堀川の水の収支は、いろいろな下水処理水が流入をして、日量約30万m³である。これらは、合流式を分流式にすることによってどのくらい変化があるのか。

事務局

水の収支として流水量の数値は、雨が降っていないときのもので、滞水池の量は、雨の初期雨水を入れる量、浸水対策としての量であり、比較するのは難しいと思われる。

委員

直接はできなくても、雨水の分流式によりどのようになるかは計算されていると思うが。

事務局

合流式改善によってBODの改善をするという整理はされているが、流域ごとの浸水対策として個々の滞水池の対策は、下水道の方で計算されている。

委員

東部丘陵地帯における守山から千種、名東、緑区の宅地開発が進み、ため池が減少し、水田の減少も併せて保水力が低下していく状況にある。猫ヶ洞池・千種台川、堀川の猿投橋の下流で矢田川に排水しているが、矢田川自体がもう天井川になっているという現状があり、堀川だけの流域では見ていけない部分もあると思う。

事務局

矢田川への排水機能は、名古屋市下水道は合流式であるため、通常の汚水は各処理場の方に流下させている。ちょっと雨が降ると、下水管の排水能力が低いため、雨水吐のところで一旦落とし、ポンプ所に行く管で矢田川に排出している。特に堀川北部の流域がこういう形態になっている。基本的には堀川へ流しており、自然排水の形で流している。

委員

堀川は、木曽川上水使っており、結果的には木曽川の水を下水道から堀川に出している。それ以上の許容がないので、雨はどこへ流すかということを経済的に考えないといけない

と思う。

資料あるいは説明の中の「名古屋駅がやられますよ」とあることに対して、具体的な対策はここでやるのか、市は考えているのか。

事務局

名古屋駅についても、現在雨水の調整機能を持った池をつくっている。堀川の北部地域では、地形的特徴で傾斜が名古屋駅に向かっており、また、堀川を掘ったとき、最初は治水機能がなく、その後付加されて現在に至っている。その歴史的な状況も十分考えながら今後の治水計画をつくっていかなくてはならない。

委員

江川が気になる。少なくとも大正から昭和のときは開渠で、普通の川で、堀川よりも幅員が広い、あるいはほぼ同じぐらいの河川であった。暗渠にして50～60年後には、それなしで堀川だけで議論していくのは...

排水機能を持っていると思うので、江川の方で何か手を打てば、堀川の方が少し負担が減るのかということも教えてほしいと思う。

委員長

幾つか宿題が今日出されたと思うので、次回に御回答をいただければと思う。

本日はまず第1回目ということで、これぐらいで終了させていただきたい。また、今日の議論の内容については、事務局の方で取りまとめをお願いしたい。

事務局

次回は現地視察を予定している。航空写真で紹介したコースを回る予定である。

時期は12月ごろになるかと思う。また連絡させていただく。

4 . 閉 会

(了)